NEW CROWN　授業実践事例

BOOK 3　LESSON 1　授業例①

M.Y. 先生

指導計画表
（全 7 時間）

時間	学習内容・主な活動
1	■GET ・単元の題材紹介 ・単元計画の説明 ・単元を通した課題の提示
2~3	■GET ・既習の受け身形の復習 ・本文読解
4~5	■USE Read ・「3 ラウンド発問」を通した本文読解 ・マッピング・要約文を　通した本文読解
6~7	■Speak ・スピーチ原稿作成 ・スピーチ発表

実践例

1.　主体的なリーディング活動を目指して

中学校学習指導要領外国語では「思考力・判断力･表現力」の育成が重視されており，「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の 4 技能のバランスの取れた実践的コミュニケーション能力の育成を図ることが今後の授業改善に求められている。

これまで私自身，生徒に教科書の本文を予習させる宿題を課していたが，生徒にとってリーディングは受け身の活動であり，こっそり教科書の本文訳が載っている参考書を丸写しする等してなんとか乗り切ろうとする生徒もおり，無意味な作業と化していた。そこで本単元では，生徒の主体的なリーディング活動を促し英文の内容理解を深め，表現活動につなげるような，4 技能を関連づけて活用できる言語活動を行うことが大切であると考え，4 技能統合型リーディング指導に視点をあてて実践を行った。

2.　統合型リーディング指導の展開

本単元における 4 技能統合型リーディング指導に視点をあてた指導の展開は（資料 1）のとおりである。

活動	段階	該当の課	配時	各段階のねらい
pre-reading 事前活動	導入 (興味・関心)	GET	1	題材に興味をもたせる
while-reading 事中活動	理解（基礎）	GET USE(Read)	1 2	メッセージの正確な理解を促す
	思考（発展）	USE(Read)	2	主題を通して読み深める
post-reading 事後活動	表現	Speak	2	本文で学んだことを活用する段階

（資料 1　4 技能統合型リーディング活動に視点をあてた指導の展開～Book3 Lesson1）

単発で読み物教材を取り入れるのではなく，教科書を中心に据えた授業を展開することで，教科書で学習した内容を活用させる力を育成していく。大切なことは，まず導入段階でいかに教科書の題材に興味をもたせるかである。そして理解段階で語彙・文法・構文・文章構成等を正しく理解させ，意味内容を正確に捉えさせることである。さらに思考段階で読みを深めるために，本文の背景にある主題や筆者の考えに焦点をあてて読み取らせ，最後に表現の段階で，教科書の表現や内容をもとに，生徒の考え等を表現させるよう単元を構成していくことが重要である。

3.　生徒が主体的に本文を読み進める発問の工夫

単元を通して生徒が主体的に読み進め，深く思考し，自分の考え等を豊かに表現するための一つの手立ては教師の「発問」である。効果的に発問するには，各段階のねらいを明らかにして，どのような支援が必要か，各支援と連動してどのような発問が必要になるかをあらかじめ考えておくべきである。私は各段階毎の特性や指導の配慮事項について以下のように考える。

導入段階では，短時間で，説明しすぎず，生徒に本文を読みたいという気持ちや自分との接点を見出し，身近に感じさせることができるように配慮することである。また理解段階では，生徒の本文理解の基礎を作るために，生徒が主体的に理解できる手立てを講じることである。さらに思考段階では，本文の主題に迫り，本文の真の意味や筆者の考え等を，自身の実体験と重ねながら，リアルにとらえさせることである。そして最後に表現段階では，生徒の考えを表現させる働きかけをすることで，本文をさらに深く読ませ，学んだ内容や表現を活用させることにつながる。そして以上の点を踏まえ（資料 2）の内容に考慮して各段階の発問を作成した。

段階	発問の留意点
導入 (興味・関心)	○写真などを使って教材を身近なものにする ○読めば解る謎かけをする ○主題に関する問題を投げかける
理解 （基礎）	○主題への理解を深めるための問いを絞る ○生徒の理解を導く問いのステップがある（「概要」→「詳細」→「推論」） ○生徒の力で読めるヒントの情報を準備する
思考 （発展）	○主題に深く関わる部分を問う ○多様な捉え方のできるものを問う ○本文に書かれていない内容を推測させる ○本文内容に対する自分の意見を表現させる
表現	○表現活動の目的、対象、場面、表現させるまでのステップを明確にする

（資料２　各段階の発問の留意点　※参考文献 1)を参考に筆者が一部変更）

4.　統合型リーデングの交流等における学習形態

生徒が学習意欲を高め，主体的に読み進めるためには，他者との交流をすることが不可欠であると考える。そうすることにより，さらに生徒の学習に対する達成感を高め，最終的に 4 技能をバランス良く高め，実践的コミュニケーション能力の育成につながるものと考える。本単元では，発問に対する各自の考え等の交流活動の流れとして，「①ペア，または 4 人グループで確認・交流」「②クラス全体で確認・交流」を行った。段階が進むにつれて生徒は間違えを恐れず，活発に意見等を出すようになり，他者の考えを聞いて自分の考えに付加・修正をする生徒も出てきた。なお，グループの人数は 5 人以上になると，何もしない生徒も出てくるので，男女混合の 4 人グループが最適であると考える。交流中は，全員が意見交流等に参加しているかどうか常に気を配り，適宜助言等をする必要がある。また，ペア・グループ編成については，個々の能力や人間関係に配慮した。

5.　Lesson 1　指導の実際

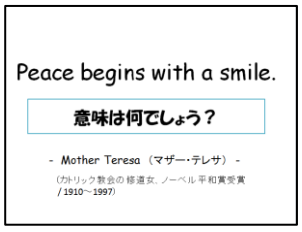
①導入段階

まず主題に関わって，辞書なしで理解できるレベルの表現が使われている偉人の名言を，パソコンのプレゼンテーションソフトで提示し，それらの意味を考えるグループ対抗クイズ大会を行った。最初は教科書の裏表紙に載っている偉人のことば(教科書に載っているものとは別のことば）から始め，最終問題は，USE Read の Pete Gray のことばを出題した（資料 3）。ここでの交流活動は，主体的に学習に参加する態度を養うために，一人 1 回は自分で考え解答する機会を設けることで，クラス全員を活動に参加させるようにした。

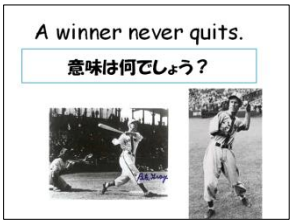
その際，提示した写真を見ながら，Pete Gray（生徒にはまだ名前等は伏せている）は右腕がないことを視覚で理解させた。生徒からは「右腕がないのに野球ができるなんてすごい」「なぜ右腕を失ってしまったのか」等が出てきた。また Pete Gray のことばには新出単語も含まれており，その意味を正確に理解できていなかったので，本単元を通して本文の内容やそのことばの意味を学んでいくことを確認した。そして単元の最後に「“A winner never quits.”には彼のどんな思いが込められているのか」を改めて考えることを伝えた。さらに Speak で，学級内で自分の好きことばについてのスピーチをすることも伝え，だれからどんなときにおくられたことばなのか，また好きな理由等も考えておくよう伝えた。

なお授業の最初のウォームアップの活動として「名言クイズ」を思考段階，表現段階で取り入れることで，自分の好きなことばを決める際のヒントを与えることにした。

第 1 問



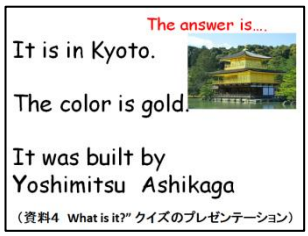
第 4 問



（資料 3「名言クイズ」のプレゼンテーション）

② 理解段階（基礎）

GET では，既習の受け身形の復習を教科書の本文読解や聞く・話す活動を通して行った。ここでのウォームアップ活動（“Who am I? / What is it?”クイズ）は，グループで協働して行う。この活動では，全員がクイズに参加し，受け身形を使った英文を書く活動を行うことにより，主体的に授業に参加する意識の向上と，基礎・基本の定着をねらう。一人一人に解答させるので，生徒の様相観察から，補充が必要な生徒には個別に指導した。



（資料4 What is it?” クイズのプレゼンテーション）

USE Read では，主題への理解に導くために，本文を違った角度から計 3 回読ませ，大まかな内容から詳細な情報を読み取らせる段階的な読ませ方「3 ラウンド発問(池野, 2000)」を行った。生徒の実態を踏まえ，読ませるタイミングと読み取らせる内容，具体的な発問については（資料 5）の通りである。

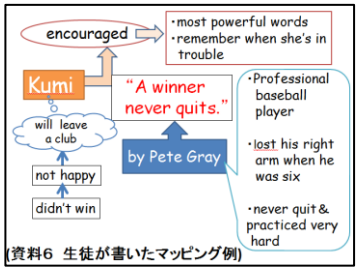
ステップ	読ませるタイミング	読み取らせる内容	具体的発問例
1st Reading	新出語(句)の意味と発音を音読中心確認した後	・大まかに読んで理解できるような話題や情報　(**概要**)	「久美はどんなことばが好きですか」など
2st Reading	本文の重要文法・構文などを確認しながら（生徒の本文理解の度合いによる）	・詳細な客観的・具体的事実 (**詳細**)	「Pete Gray はどんな人ですか」など
3rd Reading		・事実から推論が必要な内容 ・理由、目的、筆者の態度や感情、意図など (**推論**)	「このことばに込められた Pete Gray の思いは？」など

(資料 5　LESSON 1 における 3 ラウンド発問)

なお，本課の文法ポイントである受け身形は既習事項なので，本文の訳等の解答そのものを生徒に与えるのではなく，文の意味の取り方のヒントとして間接的な情報から直接的な情報へと段階的に与えていき，生徒が自力で英文を読み進めるようにした。また 2nd Reading の発問は，生徒は何を答えて良いか戸惑っていたので，内容を整理するために，「ピート・グレイの幼い頃の夢は何でしたか」「彼が 6 歳の時，何が起こったのか」「彼は結局何になったのか」を英語で質問した。

③ 思考段階（発展）

さらに深く読ませるために，キーワード・キーセンテンス探しをした後，マッピング（資料 6）を行った。マッピングは中央にキーセンテンス(ここでは “A winner never quits.”) を書かせ，あとはある程度自由にキーワードやフレーズを書かせた。ある程度自力で考える時間を与えた後，ペアで相談する時間を与え，グループでマッピングに関する説明をさせた。そしてマッピングや交流の内容を参考に 5 文以上の要約文を書かせた。（資料 7）



(資料6 生徒が書いたマッピング例)

“A winner never quits.” was said by Pete Gray.
He lost his arm when he was six. But he never quit his dream to be a baseball player and practiced very hard. And finally, his dream came true.
Kumi was impressed by his words when she thought of leaving the club. She thinks these words are the most powerful of all and remembers them when she is in trouble.
(資料7 マッピングをもとに書いた要約文)

そして最後に「このことばに込めたピート・グレイの思いは何でしょうか」と発問し，グループ内で交流させた。生徒からは「あきらめなければ夢は叶うということを訴えたかったのではないか」「自分にできたのだからみんなにもできるということ」等の意見が出された。

④ 表現段階

導入段階で，本単元のゴールの活動の見通し(受身形の文を使って自分の好きなことばについてのスピーチ原稿を書き，クラス内で発表する)を提示したり，本単元を通して「名言クイズ」を行ったりしたことで，生徒は事前に書く内容を決め，すぐに書く活動に入ることができた。書く内容については教科書 p.9 の 4 つの注意点を参考に書くよう指示した。そしてまずは自力でスピーチを考える時間をとり，その後グループで交流しながらスピーチを完成させた。さらに Try Listen では教科書 p.9 に提示されている 4 つの視点を中心に，要点等を正確に聞き取る活動を行った。まずはペア同士で，その後グルー

プで，最後は全体で発表させた。日頃は真面目に頑張る生徒がスピーチで「しんどくて何もしたくない時に…」と発言すると，「私も…」と聞いていた生徒から共感的な発言が出る等，終始，和やかな雰囲気のなかで発表させることができた。

5.　おわりに

各段階で発問の留意点を意識してきたが，実際の生徒の反応が予想していたものと違うこともあり，発問の視点や発問の形式についてはさらなる研究が必要であることを感じた。またマッピングも生徒それぞれで，自由度が高いものほど教師の指導の負担は大きいのだが，生徒たちは苦手なリーディングに主体的に取り組んでいたことは成果である。今後も4技能のバランスのとれた言語活動や単元構成を工夫することが，真の実践的コミュニケーション能力の育成につながると考える。

【参考資料】

田中武夫・田中知聡(編)(2009)「英語教師のための発問テクニック」
卯城　祐司(2011)「英語で英語を読む授業」